

【大会委員会企画】

待遇コミュニケーション学の位置づけ

——関連する研究分野との関係——

李 址遠・任 ジェヒ・金 桂榮・丁 雪花・蒲谷 宏

1. 本稿の主旨

本稿以下の論考は、2016年秋季大会における大会委員会企画として発表した「待遇コミュニケーション学の位置づけ——関連する研究分野との関係——」に基づき、待遇コミュニケーション学の研究上の位置づけについて、関連する研究諸分野との関係の中、主に「場面」とコミュニケーションとのつながりがどのように捉えられているのかという点に焦点を絞り、その要点を示そうとしたものである。

蒲谷・高木（2008）で述べたように、待遇コミュニケーション学とはこういうものだと決めてしまうのではなく、大まかな輪郭を描き、関連諸分野を包摂していくという方向性は現在でも変わっていないが、それがやや曖昧な姿勢であることは否めない。そこで、待遇コミュニケーション学がどのようなものであるのかを関連分野との関係によって見極めていきたいという趣旨により、あえて大きな課題に挑んだ次第である。

主に「場面」とコミュニケーションとのつながりについて検討しているが、待遇コミュニケーションにおいて、「場面」は最も重要な概念の一つであり、「人間関係」と「場」の総称としている。そうした「場面」の捉え方と、文脈、コンテキストなどという術語で表される概念との関係などについても、探っていく必要があるといえるだろう。

「コミュニケーション」の捉え方も、表現行為が中心となるもの、理解行為を取り込もうとする立場、相互行為を重視する観点など様々であり、そうした点に関する異同を明らかにしていくことも大切な課題となる。

関連する研究分野としては、大きく、待遇表現研究、語用論、ポライトネス理論、社会言語学、コミュニケーション学の五つを採り上げて考察している。もちろん、待遇コミュニケーション学と関連する分野は、認知言語学、心理言語学、文化人類学等々、多岐に亘っているのだが、ここでは代表的なものに限っている。また、それぞれの研究分

野も相互に関連し、包摂し合う関係にあり、その意味では、明確に区分して扱えるものではない。以上の点を踏まえ、とりあえず検討の第一歩を踏み出すことにした、というのが以下の論考の主旨である。

2. 待遇コミュニケーション学の概要

ここでまず、前提となる、待遇コミュニケーション学について、蒲谷 (2013) に基づき、その概要を見ていくことにする。ただし、これは、あくまでも待遇コミュニケーション学における一つの立場、考え方であり、2013 年までのまとめとして示すものである。

「待遇コミュニケーション」の規定については、以下のように記述されている。

「待遇コミュニケーション」というのは、従来の「待遇表現」に、「待遇理解」という観点を加えて「コミュニケーション」を捉えようとするものであり、言い換えれば、コミュニケーションを「待遇」という枠組みにより捉えようとするものである。

「待遇」というのは、コミュニケーション主体（表現主体・理解主体）が、そのコミュニケーションにおいて、自己と他者との関係（上下親疎、立場・役割などの関係）—「人間関係」—をどのように認識し、位置づけようとするのか、自己がコミュニケーションを行う経緯（時間的位置）や状況（空間的位置）—「場」—をどのように認識するのか、という観点のことである。

したがって、待遇コミュニケーションとは、コミュニケーション主体が、人間関係と場—それらを総称した「場面」—をどのようなものと認識し、それをどう表現行為、理解行為—それらを総称したコミュニケーション行為—に反映させようとするのか、そして、そのコミュニケーション行為を通じて「場面」をどう変容させていこうとするのか、ということに重点を置いて、コミュニケーションを捉えたものになるわけである。(p5、引用は、蒲谷(2013)より。以下同様。)

また、本稿に関連する論点についての概要としては、次のようにまとめられている。

「第1章のまとめ」(pp.16-17)

【第2節】本研究の意義

(1)「〈言語＝行為〉観」という言語観に基づく待遇コミュニケーション研究は、従来の、敬

語、敬語表現、待遇表現に関する研究を乗り越えていこうとするものである。

(2)言語というものをコミュニケーション主体のコミュニケーション行為として捉えることにより、言語研究が「人間」について追究していくものであり、それが必然的に「社会」、「文化」の問題と関係していくこと、それを示すことにも本研究の意義がある。

(3)一般性、普遍性を求める研究の成果が、再び一人一人の人間の行為に戻ることによって、言語研究と言語教育研究とがその本質において連動していること、それを示すための基礎となる言語研究になりうることを、本研究の持つ最も重要な意義だと考えている。

【第3節】研究上の位置づけ

(1)本研究では、言語の実態を踏まえつつ、筆者自らの言語観に基づく理論的展開と、そこから導かれる見解を述べようとすることに主眼がある。

(2)局所的な議論に陥ることなく、基本的な理念や言語観と具体的な研究との関連性、整合性を重視し、待遇コミュニケーションに関する本質、待遇コミュニケーションという捉え方をすることの意義、そうしたものの全体像を示すことに努めたい。

(3)「待遇コミュニケーション」という術語そのものに拘泥することにはあまり意味はないが、コミュニケーションを「待遇」という観点から捉えようとするものの意義については、日本語学においても、日本語教育学においても、考えていくべき大きな課題であると考えている。

(4)本研究に関連する先行研究としては、待遇コミュニケーションの根本にある、コミュニケーション主体が人間関係と場—「場面」をどのようなものと認識するのか、そして、その認識がコミュニケーション主体の意識やコミュニケーションの内容や形式とどう関わってくるのかという観点に共通性のあるものが挙げられる。

(5)待遇コミュニケーションの研究は、従来の敬語論、待遇表現研究、社会言語学、語用論、ポライトネス、コミュニケーション論などとの関連が深く、それらとの関係をまったく抜きにして論じることはできない。しかし、現段階での社会言語学や語用論では、必ずしも敬語とコミュニケーションに関する明確な位置づけができていないのではないかと考えられる。

「第2章のまとめ」(pp.58-59)

【第1節】「〈言語＝行為〉観」

(1)本研究の基盤となる言語観は、「〈言語＝行為〉観」である。それは、言語というものを個々のコミュニケーション主体(表現主体・理解主体)の個々のコミュニケーション行為(表現行為・理解行為)として成立するものだと見做す言語観である。

(2)「〈言語＝行為〉観」は、言語過程説における言語本質観によって導かれたものであるが、言語過程説の考え方をそのまま踏襲するものではない。

(3)「〈言語＝行為〉観」においては、行為としての言語と、それを成立させるコトバとして

の「言材」とを区別するが、それらはいずれも個々のコミュニケーション主体において成立するものとして捉える。

(4)言語観の適否や優劣を論じることにはあまり意味がない。その言語観に基づくどのような研究に展開するのか、という点を明らかにすることこそが重要である。

【第2節】コミュニケーション行為とコミュニケーション主体

(1)コミュニケーション行為というのは、基本的には、表現行為、理解行為の総称として位置づけられるものであるが、表現行為それ自体もコミュニケーション行為であり、理解行為それ自体もコミュニケーション行為である。そして、表現行為—理解行為の「やりとり」もコミュニケーション行為であり、表現行為—理解行為、表現行為—理解行為、…という「くりかえし」もコミュニケーション行為として捉えられるものである。

(2)コミュニケーション行為の主体がコミュニケーション主体である。コミュニケーション主体の認識によって、コミュニケーション行為のすべてが決まってくる。待遇コミュニケーションにおいても、コミュニケーション主体の認識によって、待遇コミュニケーションのすべてが決まってくる。

(3)待遇コミュニケーションにおける、待遇表現と待遇理解の関係も、そのようなコミュニケーション主体のコミュニケーション行為—表現主体の表現行為、理解主体の理解行為として位置づけられるものである。

【第3節】人間関係と場—場面

(1)「人間関係」とは、コミュニケーション主体自身が自己と他者との関係をどう認識するのか、どのようなものとして位置づけようとしているのか、という観点である。

(2)「自分」、「相手」、「話題の人物」という人間関係の捉え方は、客観的に、固定的に規定されるものではなく、個々のコミュニケーション主体がそれをどう認識し、位置づけるかというに基づく、相対的、動的なものである。

(3)それぞれのコミュニケーション主体は、「自分」、「相手」、「話題の人物」の関係を、「上・下・親・疎」の関係、それぞれの「立場や役割」、「恩恵を与える者・受ける者」などといった関係として捉え、そこには好き嫌いといった感情なども含めた複雑な認識が絡んでくる。

(4)「場」とは、コミュニケーション主体が認識する、コミュニケーション主体がコミュニケーション行為を行う時間的（文脈・経緯）および空間的（状況・雰囲気）な位置のことである。

(5)「場」は、コミュニケーションの制約となるものであると同時に、固定的なものではなく、コミュニケーション主体が作っていく動的なものだといえる。

(6)「場面」は、「人間関係」に関する認識と「場」に関する認識が融合したものであり、コミュニケーション主体が認識する「いつ・どこで・どのような状況で、だれが・だれに・だれのことを」という枠組みである。

(7)待遇コミュニケーションにおいて、「場面」は最重要の枠組みであり、他のすべての枠組みに大きな影響や制約を与えつつ、状況に応じて変容していく動態性の高いものだといえる。

待遇コミュニケーション学と先行研究の分野との関係については、次のように述べられている。

「……本研究の基盤となる考え方は、言語とはコミュニケーション行為そのものだとする「〈言語＝行為〉観」であるため、言語観を異にする諸研究との関連性を持たせて論じることには、かえって無理が生じると思われる。また、事実として、本研究において直接参考にした先行研究は少なく、研究の結果として先行研究との関連が見出せるというものが多い。

ただし、これらの課題は、従来の敬語論、待遇表現研究、社会言語学、語用論、ポライトネス理論、コミュニケーション論などとの関連が深く、それらとの関係をまったく抜きにして論じることにはできないだろう。」(p12)

そして、今後の展望については、次のように述べられている。

「待遇コミュニケーション研究の今後の展望としては、次のようなことが挙げられる。

まずは、待遇コミュニケーションという捉え方により、従来の敬語、敬語表現、待遇表現に関する研究をさらに深化させていくことがある。現代共通日本語という範囲から、共時的、通時的な広がりを追究していくことも必要であろう。また、社会言語学、語用論、コミュニケーション論などとの関係を明確にした上で、相互交流を強化していくことも期待される。日本語におけるポライトネス研究とのつながりも探っていく必要があるだろう。」(pp.329-330)

従来、待遇コミュニケーション学に対して、以下のような問いかけがなされてきた。

- ・待遇コミュニケーション学は、これまでの関連研究分野と何がどう違うのか？
- ・待遇表現論、敬語論と何がどう違うのか？
- ・語用論とは何がどう違うのか？
- ・ポライトネス理論とは何がどう違うのか？
- ・社会言語学とは何がどう違うのか？
- ・コミュニケーション学とは何がどう違うのか？

これらの問いかけは、それぞれに極めて大きなものであって、研究の本質的な面でも、また内容的な面でも、容易に答えが出せるようなものではない。しかし、だからといって、こうした問いかけを等閑視することもできない。そこで、まずは概略的ではあっても、それぞれの研究分野との異同について何らかの見通しが出せるところまでを目指したいと思う。当然のことながら、異同のすべてを明らかにすることは不可能であるが、待遇コミュニケーション学として行っている研究にどのような意義があるかを見出すためにも、待遇コミュニケーション学の研究上の位置づけをすることに意味があると考えられるものである。

究極的には、待遇コミュニケーション学は、他の分野と関連しつつ、それらすべてを包括する研究分野だということも主張したいわけだが、それだけを述べたところで意味はない。他の関連諸分野と何がどう関係しているのか、現状で行われている研究はどのような意義を持つものなのか、まだ研究が及ばないところはどのような領域なのか、などといった点を見極めていこうとすることが重要なのだといえるだろう。

【参考文献】

- 伊藤由希子・王慧雋・田所希佳子・任麗潔 (2013) 「「社会」という視座からの待遇コミュニケーション学—「広がり」としての待遇コミュニケーション学の可能性」『待遇コミュニケーション研究』10号 大会委員報告 待遇コミュニケーション学会
- 蒲谷宏 (2006) 「「待遇表現教育」の歴史と展望—「敬語」の教育から「待遇コミュニケーション」の教育へ」『早稲田日本語教育の歴史と展望』第7章 早稲田大学大学院日本語教育研究科編 アルク
- 蒲谷宏 (2013) 『待遇コミュニケーション論』大修館書店
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (2013) 「待遇コミュニケーション学の可能性」『待遇コミュニケーション研究』10号 創設5周年記念大会 (2012年度秋季大会) シンポジウム記録 待遇コミュニケーション学会
- 蒲谷宏・高木美嘉 (2008) 「待遇コミュニケーション学の構築を目指して」『待遇コミュニケーション研究』5号 大会委員会企画 早稲田大学待遇コミュニケーション学会
- 川口義一・坂本恵・蒲谷宏 (2003) 「「敬語」から「待遇表現」、そして「待遇コミュニケーション」へ」『待遇コミュニケーション研究』創刊号 座談会 早稲田大学待遇コミュニケーション研究会

(文責 蒲谷宏)